

書評

下村寅太郎著『ブルクハルトの世界』

（序言 四頁、本文 六三六頁、注および「あとがき」一一頁、昭和五十八年。岩波書店）

嶺 秀 樹

本書は（ヤコブ・ブルクハルトについての）十年にわたる研鑽が生み出した総合的研究である。単に歴史家や美術史家のみならず、「歴史」という事柄に思索の課題を見い出す哲学者にとつてもまた重要なこの思想家への、よき手引きとなる労作である。内容は、序章「ブルクハルト像再構成の一つの試み」、第一章「美術史家」、第二章「文化史家」、第三章「歴史哲学者」からなっている。この構成からも分かるように、著者は、ブルクハルトを歴史家とみなし副次的に美術史家とみなす一般的常識とは異なり、彼の全体像をば「美術史家・文化史家・歴史哲学者」の三側面の密接な内面的連関の解明を通して浮き彫りにしようと試みている。この全体性に於て初めて、彼の美術史・文化史・世界史の独自性も理解されると考えるからである。序章に於ては、かなり詳しい伝記の中でブルクハルトの人間像が描き出され、特にベルリン遊学時代の恩師にして友人である美術史家F・クーグラールとの出会い及び彼からの影響、ランケとの否定的関係等の叙述は、ブルクハルトの思想を理解する助け

とならう。本章に入つて、ブルクハルトの著作全体にわたつて詳細な紹介がなされ、とりわけ一般には通読されることの稀な大著『ギリシア文化史』の叙述や、ブルクハルト史観の理解にとつて決定的な『世界史的考察』の叙述はきわめて有益である。しかしなんといつても本書の特色（著者がブルクハルト像を再構成する視点）は、彼の最後の作品である『ルーベンス回想』に注目し、ブルクハルトの労作全体をこの遺作に収斂する過程に於て理解し、その統一性と完結性を際出たせようとする試みにある。著者は、ブルクハルトのルーベンスとの出会いの内に、彼の美術史・文化史・歴史哲学の根底をなす「歴史」の思想が具体的な形で現われており、そこからブルクハルトがいかなる美術史家であったかが示され得ると共に、「世界史的考察」に於ける歴史的研究の理論的反省の全体がより明確に理解され得ると考えているのであらう。このような趣旨に沿い、筆者も亦ブルクハルトのルーベンス問題と『世界史的考察』に於ける歴史哲学とに視点をしぼつて、本書を紹介し批評したい。

著者は、まず『ルーベンス回想』がブルクハルトの最後の著作であり、「遺書」の意味を持つ理由を問題とする。すなわち、何故に特にルーベンスが選ばれたのか、又それとブルクハルトにおける美術史並びに文化史の理念と方法との間にどのような係わりがあるのかということが問われる。この問に対する答は、端的に言つて、画家ルーベンスはブルクハルトの意味で「歴史家」であり、ルーベンスが芸術家としてカンヴァスの上に果したものに於て、まさにブルクハルトが歴史家として果そうとした歴史の叙述の理念のその実現が見い出されるといふ所に成り立つ。つまり普遍的なもの、証言をその中に認め得る限りに於て個別的なもの、意義を認めるブルクハルトにとつて、ルーベンスはその時代の証人としてのみならず、より普遍的な世界史の性格として認められるのである。ルーベンスは、瞬間的なものを完全に支配し、歴史的なものを力強い瞬間的運動に於て強烈に劇的に表現することに長けたパロックの巨匠である。彼は過程としての歴史をいわば決定的瞬間に凝縮・結晶せしめて形像化し、それによつて、宗教、伝説、神話、叙事詩、歴史、肖像、自己の生活圏等、あらゆるものを、あらゆる状況・動態に於て描き出した。かくして、ルーベンスの絵の中には「世界」が現前するのである。この意味で、彼の芸術は、ブルクハルトの歴史叙述がある特殊な事実あるいはある人物のエピソードを叙述しながら人物の全体をいきいきと表現し具体化せしめてい

る独自の手法に対応するのである。著者によれば、歴史を像として形成することを歴史家の理想とするブルクハルトにとつて、ルーベンスは、それ故にその模範的實現であつた。ルーベンスは、ヨーロッパ千年の美術史を通じてその根柢をなした創造的形成の理念の実例であり、彼に於て古典、ギリシアとイタリア・ルネサンスとの、北方と南方との綜合が、さらにはヨーロッパ文化の伝統的の理念の實現とその「連続性」が認められる。つまり、ブルクハルトは、ルーベンスを通して「世界史」の連続性を直観しようとしたのである。

その際ブルクハルトは、ルーベンスの象徴的・寓意的な表現法に注目し、その芸術的意味を強調する。この点においてルーベンスの「歴史画」が単に偶然的な現実的事実を描く歴史画と區別されるからである。ルーベンスは象徴や寓意によつて、瞬間の像の中に、偶然的な光景を超えた普遍的なもの、理想的なものを表現する。科学的思惟の支配する現代に於ては、専ら客観的事実性が追求される反面、象徴や寓意に対する感受性が失なわれ、普遍的なものとはただ悟性的知性によつて把握される抽象的なものに過ぎないのであるが、ブルクハルトは、現代のこのようなものの見方、世界との係わり方に批判の目を向け、むしろ古代芸術から伝承の象徴や寓意に於て直観され想像される具体的普遍の中に、推移する生の形象の歴史的本質を直観する可能性を見出した。かくしてルーベンスの芸術には、まさにギリシア人の直観的神話的思惟に直結するものがある。歴史的事実から自由になり、象徴的寓意的表現法でもって理想的形

象界を創造することによって、彼は「偉大な歴史の語り手」となっているのである。

著者は、ピッティ画廊のルーベンスの絵「オデュッセウスとナウシカ」についての叙述（それは『ルーベンス回想』のまとめとも言える）に触れ、次のようなブルクハルトの印象深い最後の言葉に注目する。「かくして彼らは相会するのである。イオニア生れの者とブラバンド生れの者、我々の古い地球が今日まで背負った最も偉大な二人の物語者、ホメロスとルーベンスとが。」（一四五頁）

古代と近代の語り手が突如として出会い、古代史と近代史が一つの絵に於てつながるといふブルクハルトの言葉は、奇異に響くかもしれない。しかし著者は、ここにブルクハルトの独自の芸術観、すなわち美術史と文化史との融合を認め、芸術的考察と歴史の考察との一体化を認めるのである。ブルクハルトにとっては、形象を与える直観が自由な精神的活動の最高のあり方であった。それ故に、偉大な芸術作品の中にこそ、他の何ものにもまして時代の意味深き歴史的自己表現が見い出されるとされる。また美術的考察の中には単に事実の記述的歴史以上の高次の歴史という理念が存するとされる。ルーベンスの芸術的創造に於て、ホメロスを代表とする古代精神が新しい生命を与えられ、時間空間を超えた文化の連続性、文化の更新的再生の可能性が証示されているのである。「繰り返すもの、恒常的なもの、類型的なもの」に焦点を置き、世界的な連続性の直観的な把握を目指すブルクハルトの文化史も、以上のように文化の体系

に於て芸術の特別な意義を認める思想を予想し、指導契機としているのである。

著者は、歴史家としてのブルクハルトのこのような本質的あり方を次の言葉でもって総括している。「彼の芸術への関与は、現実的出来事からの逃避でなく、出来事の無常性をも認識するための秀れた道であった。単に出来事の年代記的記述から区別された歴史そのものは『*ein Schauspiel*』である。その真の意味——その理想の意味は、もはや時代史の中には存しない。寧ろ歴史の課題は単なる生起としての時代からの解放にある。そのためには、利己的見地によって濁らされない領域に帰り、『遠くからの静かな観察』、我々に対して『第二の存在』を暗示する芸術の観察と同じことが歴史の考察に要求される。」（一五八頁）

二

ブルクハルトの『世界的考察』を取り上げた第三章は、本書全体がそこに集約される頂点である。著者はここでまず第一に、ヘーゲルを代表とする歴史哲学に対するブルクハルトの対決の、そしてランケの「政治史」に対する彼の「文化史」のその特徴づけを行なう。そして次に彼の世界史の構造をテキストに沿って叙述した後、ブルクハルトの歴史像を可能にする「直観」の概念を考察し、最後に世界史の理念、即ち歴史の「連続性」の問題に入り、そこからブルクハルトの世界史像とベシムズムの意味を取り上げる。その際最も重要な点は、歴史

哲学を否定するブルクハルトが、神学的形而上学的原理を前提するこなく、〇いかにして「世界史の理念」に到達するのか、そして世界史の統一性を「伝統の連続性」に於て認識するとすれば、それはブルクハルトのどのような文化・芸術の経験に基づいているのかという問題である。

著者は、ブルクハルトの歴史哲学批判は歴史認識の単なる方法論的反省に依拠した経験主義的な主張ではなく、より深い動機、即ち宗教的形而上学的立場から独立な近代的人間の立場、つまり専ら人間の生に対する関心に基づくものと見做している。しかし、この「忍耐し努力し行動する人間」の立場とは、皮相な形而上学否定や近代の人間肯定のことではなく、ただ歴史に於ける人間を「目的」から解放し、自由な存在とすることから由来するものである。歴史哲学の目的論（例えばヘーゲルの、「意識に於ける自由の進歩」の中に歴史の発展を認め、過去から現在に至る歴史の発展を精神の自己還帰から規定する立場）や楽観的なキリスト教的弁論の形而上学的前提を放棄して、この立場は、歴史に於て、ただ「繰り返すもの、恒常的なもの、類型的なもの」のみを求める。ブルクハルトにとつて、歴史をクロノローギッシュに時間的継起的過程とみることとは、過去を現代に対立せしめつつ、過去を現代の前段階、現代を過去から発展したものとするものであり、それは歴史の意味を、我々の現代に対する意味から規定しようとする隠れたエゴイズムの立場であろう。又歴史の「進歩」という通常の想念も、すべてが「業務」となり、科学技術の進歩が頽廃をもたらし、営利追求

の拡大がとどまることを知らない現代の状況を見れば、全く疑しいことである。このようなブルクハルトの現代観察からすれば、貧困空疎な現代文化を發展し進歩したものとして過去に対立させることは笑止な僭越以外の何ものでもないのである。

ブルクハルトの歴史観に関して重要な第二の点は、「政治史」に対する「文化史」の概念の提唱である。これは歴史学の内で政治史と文化史の分野を区分することではなく、歴史の本質についての見解の根本的相違を意味する。国家を普遍者の個体とし精神的実体と見做すランケにとつては、国家は世界史の核心であり、政治史が根幹である。これに対してブルクハルトは、国家を暴力の体系とし、国家の中に人間の歴史を認めることを拒否する。国家は *Noinstitut*、つまり暫定制度であることを拒否して健全である、これに対し「自発的に起り、何ら普遍的或は強制的妥当を要求しない精神の展開の全体」としての文化こそ歴史の本質が見い出されると彼は主張する。ブルクハルトは、自発性に基づく文化を、固定的であることをその本性とし権力によって自己を保持するところの国家と宗教に対立させ、この三つの「ポテンツ」の相互的制約の關係に於て、世界史の多様な力学的構造を直観化し、形象化しようとするのである。

著者は、ブルクハルトの歴史的思想が「直観」から出発することに繰り返して留意している。この直観は決して単なる形象を直観するといった素朴なものではなく、ブルクハルトの美術史・文化史の本質を規定し制約するものとして、能動的直観であり、像を形成するような直観である。このことをより深く理解

するために、著者は『世界史的考察』に於て芸術と歴史の現実との關係について言われていることに注意を促している。彼が芸術に於て時代の証言を見る時、芸術の時間的時代的な制約を問題としたのではない。「その時その時の永遠者」という一見逆説的な表現によく言い表わされている如く、芸術の本質は、ある時ある所で、ある個人によって創造されるような普遍的なるものである。従つて芸術の永続性とは、保存され持続することではなく、舞踏・詠誦・行列・祭礼の如く、その時に見ること舞うことそのことが現出、Authentic することである。芸術作品や芸術過程は、一回的な仕方では表現されるが、それは、他の時代や他の場所でも発言できる故に不滅的であり、その時代の証言であると共に、時代を異にする我々にも直接的に呼びかけてくる。歴史的な距りを人間の近傍にもたらし直接に關連せしめる芸術は、我々を現代から解放し靈感を与え精神を統一させるのである。ブルクハルトの言う直観は、このような芸術解釈に相應する。それは、過去を記憶しつつ現在を更新し未来に對しては開かれてゐる、という芸術の三次元的地平の如く、眞の意味で歴史的存在であり、所謂歴史的研究に於て前提されている・過去から現在へ、というように水平化された時の一次元性とは區別される。歴史的事實主義・解釈学・歴史理論の企図する歴史的研究は、極言すれば過去を単に過去として加工し貯蔵することに帰し、単に間接的に教養の素材とするにすぎない。このように著者は、ブルクハルト言う所の、直観による芸術の享受の内、單なる美的享受や時代からの逃避とは全く別な現代に對す

る実践的意義を認めてゐるのである。芸術に於いてこのように自ら見、聞くことができるということ、そして他者を時間・空間を超えてこれに導くことができるということ、それは、現代の世界への係わり方の一面性を矯正し、現代の危機に立ち向う可能性を与えるのである。「ブルクハルトが過去の文化的証言と交わることによって促進しようとするものは、單なる美的享受ではなく、近代の欠陥状態を「成長」と混同したり、無限の營利、安全、交通の追求によつて『人間存在』を『事務』としている我々を、更に、この抑圧に對して無力な我々を、解放し、調整するものである。」(五七二頁)

残された一つの大きな問題は、「世界史」の問題である。世界史は單なる民族史や時代史の総和ではなく、これを超えた人類の歴史であつて、その「統一原理」と「意味」とが問われる。ブルクハルトの歴史哲学否定は、直接にはヘーゲルの歴史哲学の故にであつたが、それはブルクハルトがおよそ哲学的概念的に思惟することを回避し、常に「哲学的」になることを抑制したことに由る。しかし著者は、ブルクハルトのいう「世界史」が、すでに一つの「歴史哲学」を予想し、本来哲学的な問題であることを指摘する。そもそも「世界史」という概念が本来宗教的あるいは形而上学的な問題であり、特に世界史に於ける「発展」の思想は、キリスト教と、とりわけその終末論と密接に連関しているからである。ブルクハルトは、この発展の理念と徹底的に對決し、これを排除して世界史を理解しようとした。しかし何らかの哲学的理念を想定せず、又歴史を時間的な

出来事の物語としないで、横断的に「体系的」に考察するブルクハルトの立場からは、いかにして世界史の統一性が問題となりうるであろうか。ここで著者は、ブルクハルトの「精神は変化するが死滅しない」という根本テーゼを取り上げる。ブルクハルトはもちろん歴史的事実¹に精神的側面を認め、自然的出来事から区別された歴史を「精神の連続体」と見做している。しかし彼の言う「精神」は、確かにヘーゲルの「世界精神」につながるものであるにせよ、「理性的精神」ではなく、又ショーペンハウエルのな盲目的意志でもなく、「土竜」として働く精神、忍苦し努力する人間である。このような精神の連続性の中にのみブルクハルトは統一的な世界史の可能性を求め、歴史の過程に於ける不断の危機、つまり没落する不安に対して、伝統の連続性を保持する努力を要求するのである。従って歴史の発展を否認することは、決してただちに歴史を停滞しているものと見做し無意味なものとするにはならない。

もつとも、ブルクハルトの言う世界史の連続性とは単なる時間的連続性ではない。著者は、この連続性の概念が、ブルクハルトの芸術作品に於ける連続性の経験に依拠することを何度も強調している。「この連続性は、過去と現在がそれに於て同時に存在するという意味に於て永遠の場である。芸術作品は創造として歴史の中に於て成立しながら歴史を超えることによって過去と現在を直接に連続せしめる。」(六〇四頁) このように芸術的経験に基づき、歴史を時間的な出来事に於てではなく、非時間的な文化に於て体系的に考察するのがブルクハルトの文化

史の方法であるが、それは、認識する精神と認識される精神との出会いという「歴史的生の連続性」の場所を開くものである。著者は、ブルクハルト史学の本質を次の如く綜括している。「精神的連続性は我々の外にそれ自身に於て存在する客観的な存在ではない。それは常に意識され内面化されることによって初めて成立する。歴史は事実の単なる蓄積である『記憶』 Gedächtnis に於てではなく、内面化 *Einbildung* に於て成立する。過去を自己に関係づけること、過去に向つての自己の存在の拡張である。過去の現在化としての内面化である。それは精神による過去の再生である。精神的連続性がこれに於て成立する。歴史の連続性とは精神的内面化の連続性である。連続性の内面化こそ歴史家の本来の仕事である。」(六〇七頁)

著者は、本論の最後に、ブルクハルトのベシミストとしてのあり方に光をあてる。彼のベシミズムの由来は決して個人的経験や性格やショーペンハウエルの哲学の読書といったものに求められるべきではない。又それは時代の現実的状况に対する反応にとどまるものではなく、むしろ彼の歴史経験(特にギリシア史的体験)に由来する積極的な、実践的・倫理的な生活理念と見做されるべきものである、ブルクハルトにとつて歴史とは、ギリシアの黄金時代に於ても決して楽園ではなく地獄であった。彼は歴史の地獄の底に降りてゆき、そこに留まることによって人間の精神の苦闘を省察しようとしたのである。彼は修道士の如く世俗生活を断念すること²に於て自足し、そこで初めて地獄の中に幸運にも存在する芸術の天国を見出す。『イタリア・

ルネサンスの文化』にせよ『ギリシア文化史』にせよ、決して美的享受の讚美の書ではなく、「地獄に於て花咲く文化を認識する認識の書」であった。このようにブルクハルトの言う歴史への沈潜はもっぱら自己の解放であり、人間の一回限りの創造行為に触れ、一回限りの精神の普遍性に参入する教養に於て自由になることである。「幸と不幸のすべてを忘れて、この認識への憧れにのみ生き続ける」という『世界的考察』の最後の言葉には、彼の歴史認識を通しての「強さのベシズム」の究極的信条がよく言い表わされている。

三

上述の簡単な紹介は、本書の中の、主要と思われるほんの一部分を取り上げたのみで、六〇〇ページ以上にわたる大著に散見される様々なすぐれた洞察を蔽うべくもない。経済と政治がすべてであり、生き残ることが最大の関心となつて、その確保の条件・手段を求めることが自己目的になつてきているかのような観を呈する現代文明に強烈な批判の目を向け、生きた精神が苦闘する歴史的文化に沈潜するブルクハルトの世界を、著者はみごとに再構成し、我々にブルクハルトを見直すよき契機を与えてくれたと思う。

ここで最後に筆者の批評を加えておきたい。一つの重要な問題（おそらく本書に於ける著者の最大の関心事の一つ）は、芸術経験に依拠しての、世界史の連続性の問題である。精神の連続性は歴史認識に於ける認識する現在と認識される過去との出

会いに於て成立するが、著者も注意を喚起している如く、それが単なる時間的な連続でないことは当然である。しかし、著者が芸術経験を基にして歴史の連続性を、過去と現在を直接的に連続せしめる「同時存在」あるいは「永遠の場」と論定する時、現在の、すでにあつたものとしての過去からの断絶面が背景に退いている印象を受ける。芸術経験のその時その時の永遠性とは、過去と現在が同時に存在する場所であると共に、その時その時の「瞬間」として、他の時と全く断絶し、絶對的に固有なものとして歴史的である。

さらに、ブルクハルトは、現代の我々にとって疎遠な過去を認識しようとする場合、現在と過去の異質性を強調する。それ故に、我々は現在の関心から遠い過去の素材を扱う際に、始めは「退屈」を感じ、それを克服するのに努力を要するのである。我々の現在とは異なる過去へ自己を開くためには、自己の現在の主観的関心を除去し、疎遠なものを疎遠なものとして受け入れることが要求される。過去の疎遠なものを思惟するためには、現在の我々の、我々にとつては自明な地平を思惟し直すことが必要であり、そしてそれは、決して疎遠なものを単に自己のもの *Eigenes* に変えることではなく、疎遠なものと自己のものとの非連続性を保持して、耐え抜くことである。ブルクハルトの言う歴史認識の客観性とは、科学的認識に於ける事実性としての客観性とは全く区別され、認識者の精神の自由な介入によつて成立するにしても、このように、現在与えられているものに対してする自己の主観的な関心の否定を媒介としたものである。そ

の点からすれば、ブルクハルトに於ける・精神による過去の再生とは、著者のいう「過去に向つての自己の存在の拡張」、「過去の現在化としての内面化」(この表現はそのままではヘーゲルを思わせる)であるよりも、むしろ過去に対して現在の直接性を否定的に問題化し、現在を過去に対して外面化するという「非連続性」に於て初めて現前するような、「過去と現在の出会い」なのではなからうか。そこにブルクハルトの、例えばガダマーの解釈学のように影響作用史の連続性から過去と現在の「地平融合」を問題とする考え方との相違点もはっきり見い出されると思われる。ブルクハルトの「精神の連続性」に於けるこういう非連続性の問題は、著者も充分承知しておられるに違いない。そのことは芸術経験に於ける「そのつどの永遠性」についての叙述からもはっきりしている。しかし筆者は、ブルクハルトに於ける、過去認識の現在との連関の中に見い出される近代的主観性の批判の意味に顧みて、あえて多少のコメントをつけてみたいと思つた次第である。

いづれにしても本書は、ブルクハルトの思想の本質に肉溥する力作である。解説書の域をはるかに越えた著者の取り組み方には、著者のブルクハルトへの愛情さえも窺われる。著者のブルクハルトへの深い傾倒が彼の思想の解明を通して、一個の人間の精神的全体像にまで極まったのである。(了)

(筆者 みね・ひでき 日本学術振興会奨励研究員
〔西洋近世哲学史、京都大学文学部受入〕)

	前号(五四八号)の誤植訂正	誤	正
一二頁	七行	それは存在論的見地	それは認識論的並びに存在論的見地
一四頁	四行	das nur einziger Gegenstand	das nur ein einziger Gegenstand
二二頁	二行	117)と称してはる	116)と称してはる
三二頁	六行	' $\psi = \zeta$ '	' $\psi = \zeta$ '
四〇頁	一行	' $T \neq \emptyset(e)$ '	' $(T \neq \emptyset(e))$ ' が重復。
四五頁	七行	' $T \neq \emptyset(e)$ '	1) (2) (3)
四五頁	八行	「 $\emptyset(T)$ 」が真ならば	「 $\emptyset(T)$ 」が真ならば
五八頁	一四行	「 $\psi(T, A)$ 」が真の場合	「 $\psi(T, A)$ 」が真の場合
二二八頁下六行		<i>oratio obliqua</i>	<i>oratio obliqua</i> bei G. Frege
一五〇頁下二〇行		<i>Grundlegung</i>	<i>Grundlegung</i>
欧文2頁	28行	比較社会学接近	比較社会学的接近
欧文3頁	11行	nction- funames	function- names
欧文3頁	16行	aref ulfilled	are fulfilled
欧文3頁	18行	concept \emptyset (ξ)	concept \emptyset (ξ)
		show	show a remarkable
		aremarkable	